

※ 本記事はブログ記事として提供しています。その範疇のものとして捉えて下さい。

IQ(知能指数)を一步踏み込んで知る

「特別支援学校の先生をしていると「発達検査」を採ることができる先生は何となく専門性の高い先生に思えますよね。ウェクスラー式(WISK)を基本として、田中ビネー、K-ABC、新版 K 式、PEP など多くの標準化された発達検査がありますが、それらの理解には「IQ(知能指数)」の理解が欠かせません。さて、IQ70 以下かつ適応障害があると、「知的障害」の診断が付いて、知的障害児者手帳が交付され、知的障害特別支援学校が就学の候補校となりますよね。…で、『50-70 は軽度知的障害、35-50 は中度知的障害、20-35 は重度知的障害、20 未満は最重度知的障害』とされますが、そもそも IQ って何なのでしょう？自分の IQ を測ったことがありますか？知能指数については奥深いので折に触れて書きますが、本号は概略編です。

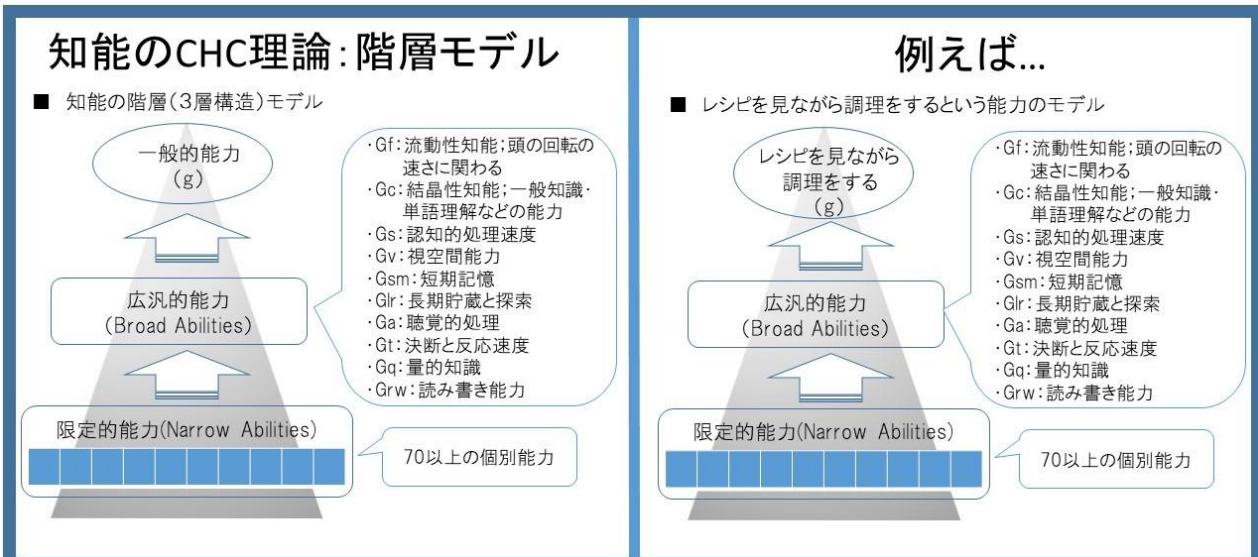
「20 年くらい前までは IQ は「精神年齢 ÷ 生活年齢 × 100」の式で算出されていました。例えば、

小学校3年生程度の認知発達で生活年齢が中学部3年生であれば

⇒ 9 歳 ÷ 15 歳 × 100 = IQ60

とされていました。しかし、生活年齢 18 歳以降は年齢を 18 歳に固定して算出するなどの曖昧さが有り、知能研究も「階層知能論(後述)」が主流になったことにより、現在ではこの算出方法は使われていません。

「最新の WISKIV(ウェクスラー式)や田中ビネー V、K-ABC 等では新しい IQ の理論(ルリア理論、CHC モデル、カウフマンモデル等)が採用されています。一般知能(g)が一層目にあり、これが人の表面的な知能を示していて、その下層に 10 の因子からなる広汎的能力があり、さらにその各下層には数十個の限定的能力があるというものです(下図参照)。



「それでは『発達検査』ではどのような知能が測定できるのでしょうか。私たちがよく使う NC プログラムは、結晶性・視空間能力・短期記憶・量的知識・読み書き能力の5因子が範疇になっていますが、IQ はできませんよね。(100 を中央値、標準偏差 ÷ 15、±30(±2σ)の中におおよそ 95%の人が入るとした IQ の仕組みの中で、どれだけ中央値から離れているかが測定できない。認知年齢スケールから従来の算出方法で推定することはできるかも知れませんが…)。つまり、NC プログラムは、対象児童生徒が何ができるのかを測定できるのみの検査ということになります。一方、世界標準の WISCIVでは、結晶性・流動性・短期記憶・視空間能力・認知的処理速度の5因子のみが測定可能なので、知能の半分の因子を使って知的能力を測れる検査です。実は現行の発達検査(知的能力検査)のどれにおいても、部分的な知能しか測定できないんです。奥深いけれど、表面上の行動のづまづきを分析する上で、NC だけでも有効ですし、下層能力値の出る発達検査はさらに強力な武器になりますよね。